

お釈迦様(ブツダ)のさとり道
釈尊の出家とは

釈尊の出家には、四門出遊の伝説がある。迦毘羅衛城におられた釈尊が、東の城門から馬車で出ると、力なく衰えた老人がいた。南の門から出ると、やつれて苦しんでいる病人に出会った。西の門から出ると、死者の葬列に出会った。北の門から出ると、輝かしい出家修行者(沙門)の姿があった。釈尊は、この出家修行者の姿にうたれて出家したと言われているが、このような事実はない。

なぜ釈尊は出家をしたのか、釈尊自身の告白を、聖求経(原始教典)から書き出した。直接の告白の声を聞きたかった。どうして出家をされたのですか、この問いに対して釈尊は、自分の考えをしゃべり始めたのです。29歳の釈尊でした。

「人間が生きていることは、体が息をしているだけでは死んでしまいます。心が願を持っていてのことです」「願とは?」「寿なるいのちのあらわれです」「寿とは?」「寿命といい、幸せにさせずにおかない願いの中に、必要なひととしてのちを授かり、そのひとが世に出家して、世を救うことです」「そうすると釈尊の出家は、ひととして生まれて、世を救うことを目的とした願にうながされてのことですね」「そうです

が、私の願にうながされて出家したのです。けれども、願の中に二つあったことをここに告白いたします」

「釈尊29歳の頃でした。迦毘羅衛城において、正覚していない(覚っていない)菩薩(Bodhisatta)であった時、聖ならざる願望と聖なる願望があったのです」「聖ならざる願望とは?」「人間には、日常生活の中で、いろいろ楽しいこともうれしいこともあり、喜、怒、哀、楽の生活をしています。悩み多い人生と考えているうちに、生・老・病・死を加え、生まれたものは死んでしまう、無常の世界があると決めつけています。これに愛別離苦(愛するものと別れる苦)、怨憎会苦(怨み憎む相手と会わなければならぬ苦)、求不得苦(求めても思いう通りに得られない苦)、五取蘊苦(煩惱に満ちた心に悩む、病や死を超越できない)を加えて、憂苦(憂鬱)の有り方、そついういやな生死の思いや恐れ、不安、苦悩を無くしたいと願っておりました。この身は「煩惱具足の凡夫」「火宅無常の世界」と思いこんでしまっていて、どうすることもできない運命のものと思い、その世界の中でせいぜい楽しいことをして、少しでも人よりも長生きしようと考えて思っていました」

生死の世界、苦悩の中にあつて、その思いを消そう、無くそう、逃れようとはからいます。その苦悩は無くなるどころか、かえって益々はげしくなります。生老病死、愛別離苦その他を持ちながら、それを無くしたい(嫌う)ことが聖ならざる願望であると気がついた釈尊は、出家への道を歩み出すのでした。

釈尊のお言葉(聖求経パーリ語原文より)

Dve 'mā bhikkhave pariyesanā ; ariyā ca pariyesanā
トゥパー マー ビックハベー パリエサナー アリヤー チャ パリエサナー
二つ ここに 比丘らよ 願望 聖なる 願望
anariyā ca pariyesanā. Katamā ca bhikkhave anariyā
アナリヤー チャ パリエサナー カタマー チャ ビックハベー アナリヤー
聖ならざる 願望 What 比丘らよ 聖ならざる
pariyesanā? Idha bhikkhave ekacco attanā jāti-dhammo
パリエサナー? イダ ビックハベー エーカッチョー アッタナー ジャーティダンモ
願望 ここに 比丘らよ 誰か一人が 自分自らに 生という法
samāno jātidhamman n eva pariyesati, attanā jarā-
サマーノー ジャーティダンマニヤ ニエーバ パリエサティ アッタナー ジャラー
有しながら 生という法を 決めてない 欲する 自分自らに 老
dhammo samāno jarādhhamman n eva pariyesati,
ダンモ サマーノー ジャラーダンマニヤ ニエーバ パリエサティ
という法 有しながら 老という法を 決めてない 欲する
attanā byādhī-dhammo... attanā marana-dhammo...
アッタナー ビヤーディ ダンモ アッタナー マラナ ダンモ
自分自らに 病という法.....略 自分自らに 死という法.....略
attanā soka-dhammo... attanā saṅkilesa-dhammo
アッタナー ソカ ダンモ アッタナー サンキレーサ ダンモ
自分自らに 憂苦という法.....略 自分自らに 雑染という法
samāno saṅkilesadhamman n eva pariyesati.
サマーノー サンキレーサダンマニヤ ニエーバ パリエサティ
有しながら 雑染という法を 決めてない 欲する

望とである。比丘らよ、「聖ならざる願望」とはどのような願望であるのか。比丘らよ、ここに誰かある一人が自分自らに(自分で)生という法を有しな

がら(持ちながら)、その生という法を決して欲しない(嫌う)。自分自らに老という法を有しながら、その老という法を決して欲しない。自分自らに病という法を有しながら、その病という法を決して欲しない。自分自らに死という法を有しながら、その死という法を決して欲しないことである。また、自分自らに憂苦(憂い)という法を有しながら、その憂苦という法を決して欲しない、自分自らに雑染(煩惱)という法を有しながら、その雑染という法を決して欲しないことである。